

企画総括

祭典を貫く企画の大柱として憲法を置き、子どもを真ん中に障害者・高齢者など、弱者のうたごえを祭典全体が大きく包みこんだ「あったか祭典」をめざした。音楽会の全てに、子どもたちと障害者、そして北陸の地の特徴を表現する郷土などの舞台を実現することで、地方の祭典の特徴を引き出す事とした。

コンサート <越の国から>は歓迎演奏会と位置づけ、地元の合唱団や演奏家・郷土芸能など、福井と北陸のうたごえの特色を生かしたプログラムで構成した。「和太鼓はぐるま」に始まり「そんな街いいな合唱団」につながるオープニングでは、弱い立場の人たちの生きるエネルギーがほとばしり、歓迎にふさわしい熱い演奏を客席に届けることができた。石塚和華ソプラノ独唱は地元作曲家・今川節（せつ）作品をとりあげ、マリンバ合奏では小学生から大人まで幅広いメンバーが華やかで楽しい演奏を披露した。石川のうたごえ「野田淳子と歌う合唱団」の演奏。日本のうたごえ合唱団は水準の高い演奏を聞かせた。斉藤清巳作品をうたう「想いの風合唱団」でコンサートを締めくくった。最後には会場一体となって「未来をかけて」をうたい交わした。“これこそうたごえ祭典”と感じるほど会場全体がひとつになり、まさに「あったか祭典」の名にふさわしい幕開けとなった。

コンサート <未来を拓くハーモニー>は最終日に開催した。パイプオルガンの演奏につづいて、福井ともつながりの深い池辺晋一郎氏の指揮で「新世界」、混声合唱組曲「悪魔の飽食」より3曲を演奏した。日中友好子どもたちの合同演奏、マリンバと並んで国内有数の生産地であるハーブの演奏と続いた。ナターシャ・グジーさんは透明な声でウクライナの民謡を歌った。「全国男声合唱団」は会場を圧倒した。

コンサート の、そして今年の祭典の締めくくりは「そして、一輪の花のほかは…」で飾った。憲法第九条が危機にさらされている今こそうたごえ作品だと、福井のうたごえの演奏力量を総集してとりくんだ。中でも、第2章「そして、一輪の花のほかは…」は難曲を練習の積み上げで克服して演奏に臨んだ。作品の内容をより深く伝えるためにステージ上部に大型のスクリーンを配し、原作の絵本を映し出した。指揮者の守屋博之氏からは「この作品に取りくむ決定をした実行委員会の鋭い目はすばらしい。演奏の中核としての役割を果たそうとしている福井のうたごえの仲間たちに心からの敬意を表する」とエールをいただいた。

【大音楽会「うたよ。未来を拓く輝（ひかり）となって】

2日目の大音楽会はサンドーム福井で総参加者6000人で開かれた。会場前には開場を待つ長蛇の列が出来た。

第1部<つながり>

オープニング、北陸3県の大人と子ども530人の「Open your eyes! ~さあ、目を上げて~」で開幕。そして、つながりのステージでは全国も含めて750人の大きな花が咲いた。中山譲さんは「サマー・カレッジなどの15年間の軌跡でもあるん

だよ。みんなの努力が、まさに実った瞬間でしたね。長い道のりも20分で終わるけど、その道を歩いてきたからこそ到達したんだよね。…」と感想を残している。ステージ狭しとうたい踊るその姿に観客は圧倒された。

「福井で生まれた太鼓を全国の仲間に聞いてもらいたい」という担当者の思いが結実して、福井の太鼓「響」が実現した。今祭典を機に出会った太鼓集団だが、成功のために大きな力を発揮していただいた。また、「うたえばいつでも青春」合唱団と名付けた高齢者のうたごえには300人が、全国労働者合同には国労北陸地本が全面的に支援をし、名古屋で職場のうたごえ代表者会議を開いて組織を広め、400人が出演してそれぞれの思いをうたい上げた。

第2部<海は人をつなぐ母の如し>

100年前の実話、「韓国船難破救助のはなし」はオカリナと朗読で構成し第2部を開始。ゲストの「サム・トゥッ・ソリ」、ネットワーク6年間の積み重ねで中味を深めた全国紫金草合唱団、10月の「ぞうれっしゃ南京公演」がきっかけで来日した南京和平鴿芸術団と、日本海を取りまく民族の交流と平和をうたい交わした。

全国女性のうたごえ「希望の灯」合唱団は620人が出演。指揮者・杉谷恵子さんの魅力的な指導で、うたごえの枠を超えた新しい参加者も目立った。杉谷氏は県外へも積極的に指導に出かけた。全国うたごえ合同では、地元の高校生も「ねがい」をうたい広がりをつくった。

第3部<かがやき>

障害者のうたごえ「うたのわ500」、青年のうたごえ、ぞうれっしゃ合同と伴奏を引き受けた武生東高校の吹奏楽部に絶賛の声が集まった。「今の教育を取り巻く重い雰囲気、を笑い飛ばすようなエネルギーを感じた」など多くの感想が寄せられている。

障害者のうたごえは「ハスの実コンサート」を母体に展開した。障害者にとっても今の社会環境は悪化の一方である。「障害者も生きる権利を持つ主権者として闘うとき。そんな主張をうたいたい」(指揮者・具谷裕司)と300人でステージに立った。青年のうたごえは創作曲「笑顔日和」をうたい、「ビリーブ」では「うたのわ500」と連帯した。青年の一人は「指揮に合わせてひとつになった時、とても不思議な感覚になり、皆一人ひとり違うのに、気持ちの向かう方向は同じなんだなあ、と胸が熱くなった」と感想を残した。

「ぞうれっしゃ」は過去に福井のうたごえでは取りくんでいないが、担当者の情熱と地域のつながりを目一杯に活かしたチームワークで600人のステージが実現できた。工夫を重ねたステージを創りあげ、未来にはばたくこの子どもたちのうたごえで大音楽会を締めくくった。

子どもから高校生、さらには若いお母さん、青年と、若いエネルギーがあふれて未来を展望できる大音楽会となった。

3つの音楽会とも会場を一杯にして音楽面でも大きく成功をおさめた。成功の要因は、第一に、全てのステージにおける「地道な練習の積み重ね」と、その結果産み出された「多

くの人達とのつながり」という財産だといえる。各ステージで地元の担当者を配置し、地域を考慮し複数の運営体制をつくり、ニュースも随時発行した。新しい歌手を集めるために、3～4月に指導者・伴奏者も決め、今まで培ってきた北陸の連帯を活かしながら、苦労しながら練習に組織に取り組んだ。それぞれのステージでは、練習会場は1カ所にとどまらず、北陸の各地で展開した。

「つながり」の45回を筆頭に「女性合同」27回など、各ステージで10回から20数回の練習を重ねた。この徹底した粘りが成功の基礎となっている。1回1回の練習の成功は演奏の確信になり、新たな参加者を呼び、参加者は「うたごえのうた」に共感もして、最終盤チケット組織の飛躍的な伸びにつながった。さらに、この地元の奮闘が全国からの熱い連帯を生んだ。

第二に、企画そのものに今まで北陸の地で培ってきた運動の実りを活かしきったことである。日常の活動により生まれた音楽専門家をはじめ、いろいろな人達とのつながりが、しっかりと花咲いた祭典といえる。杓谷恵子さんというパイタリティーあふれる指導者を得たことは、いろいろなステージが大きく展開していくのに欠かせない要素となった。合唱指導だけでなく、マリンバ、ハープなど演奏者を引き合わせてくださり、高校生の組織に奔走していただいた。自身が指導される婦人コーラスなどからも多くの参加者を誘ってくださった。また、地域の市民音楽祭における地道な活動で親しくつながりを育んできたことが武生東高校吹奏楽部の出演につながった。

祭典のメインステージとして見事に花開いたつながりのステージには、サマーカレッジ実行委員会という福井県内全域に組織され積み重ねられた運動があった。また今回新たなつながりを得た分野もあり、これからの北陸の地におけるうたごえの発展が、より大きな規模で進展していくことを保証しているといえる。富山県高岡地域で過去20年間に渡って、子ども、教師、父母たちが一緒になって開いてきた「大空へ飛べ」コンサート、石川のお母さんたちが中心にすすめる「あしたのきみに」コンサートのみなさんとのつながりも祭典成功の大きな力となった。

第三に、舞台スタッフの尽力で、スムーズな舞台進行を確保した。インターネットを駆使した事前の綿密な打ち合わせによって、多人数を大きな混乱もなく移動させることができた。それでも終演時間は延びた。どんなに長くても3時間に収めることは非常に大切である。そのためには早い段階から企画内容をより吟味する必要がある。この企画段階でのステージの絞込みとメリハリの利いた時間配分が、地域色をより際立たせる大切なポイントとなる。